



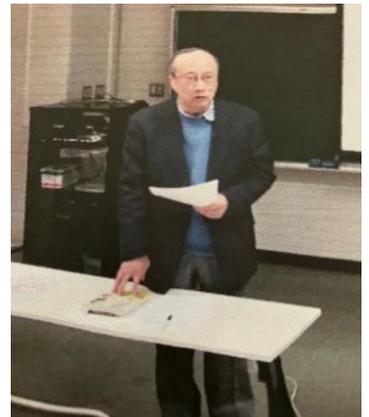
[令和8年1月14日 定例会発表要旨]

令和 8 年、新年のご挨拶

手稲郷土史研究会会長 沖田 紘昭

あけましておめでとうございます。午年の初めに当たりご挨拶申し上げます。

昨年は創会 20 周年の年として数々の行事を進め、無事に終えることが出来ました。役員の皆様はじめ多くの方にご協力いただき無事終了することが出来ました。本当にご苦労さまでした。心から御礼申し上げます。さて、今年は改めて創会の初心に帰り、郷土資料館建設の抱負を持って、しかしながらゆっくりと進んで行きたいと思えます。あちこちで資料館の話をしていると、どこからともなく応えてくれるものが出てきます。昨年は、資料館展示のメインとなるべき物件が手稲中央小学校から提供されるということ、イオンとの意見交換会では、連絡通路の使用について検討してみたいということ、山口会館が空いていて使えるかもしれないということ、手稲区の里区長や松田地域振興課課長の好意的で流動的な考えなどがありました。会員だけでは難しい事も、こうした一つ一つの動きを形あるものにしていけば自ずと道は拓けるのではないかと思わせてくれます。会員の皆さんもぜひ新年の抱負として忘れずに追及して行って頂きたいと思えます。



私は元旦に新聞各紙を読み比べる習慣があり、今年も駅の売店で 4 紙を購入しました。その中で今年の特に目立った特集を紹介しますと、道新が「千歳空港開港 100 周年」、朝日新聞が「北海道と馬の歴史」の特集が目を見ました。それぞれが見開きに年表を中心とした企画で、納得させるものがありました。当研究会も、まもなく令和 8 年度の計画をまとめねばなりません。四方に目を配りながら、ゆっくりと前進していけますよう願っています。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

[令和8年1月14日 定例会発表要旨]

「手稲の街の歩き方(提案)」

手稲郷土史研究会 杉浦 正人

1 何を、なぜ、どのように提案するか

手稲の街を歩きながら歴史を探訪することを提案します。これまで、本会では先達、先賢がさまざまな見地から手稲区の歴史を掘り起こしてきました。その集積は膨大です。これを結びつけ、関連付け、物語を紡ぐことによって、さらなる知見が得られるかもしれません。また、地域に点在する個々の名所旧跡のつながり具合を明らかにすることで、見慣れた街が違って見えてくるかもしれません。実際に現地を歩くことで得られる醍醐味を大切にしたいと思えます。

2 本題：手稲の街の歩き方（提案）

2024年に刊行した拙著『さっぽろ探見』で、手稲区について「手稲はタンネウエンシリ(手稲山の旧称)のたまもの」をテーマとして歴史散歩のコースを設定しました。JR 手稲駅を出発・終着地点として、約 4 km、歩いて 1 時間 20 分の行程です。見どころポイントを 9 箇所、設けました。5 万年前の手稲山の山体崩壊によって生じた「流れ山」(小丘)が、寺社や墓地など聖域的な場所となっています。その流れ山をぬうように「手掘りの小川」が開削されました。国道 5 号の旧道は手稲山の懐に沿って通じ、低湿地を避けるように湾曲しています。この旧道を幕末～明治の初めに松浦武四郎や島義勇が歩いたのかと想うと、ロマンを感じます(下記 3・その 2 参照)。



3 ちょっと、寄り道／ちょっと、深掘り

その 1 手稲山の山頂は、手稲区か、西区か？

札幌市手稲区と西区は、手稲山を境目にして境界線が分かたれています。北側が「手稲区手稲金山」、南側が「西区平和」です。これはもともと、手稲町当時の字(あざ)の境界(金山と平和)に由来しています。手稲町が札幌市に合併し、政令指定都市になって札幌市西区となり、分区により西区と手稲区に分かれました。手稲山は手稲区のシンボルですが、分区によって山頂がどこに帰属するか問題となります。手稲の名を冠し、手稲区のシンボルの山である以上、山頂は手稲区であってほしいと願うのは人情です。実際にはどうでしょうか。

手稲山の頂上付近には一等三角点「手稲山」が置かれています。三角点が置かれる山は他にも見られますが、一般的には三角点の所在地＝山頂、とは限りません(ここでいう山頂とは山の最高標高地点と解する)。ただし、国土地理院の情報によると手稲山では三角点を山頂としており、同院の「一等三角点の記」(図 1)によると三角点「手稲山」の所在地は「札幌市西区平和 439 番 1」です。とすると、手稲山の山頂は西区になります。

理屈では上記のとおりですが、ひとまず断定は避けます。今後、国土地理院の専門的な見解を伺いたいところです。そもそも手稲山の山頂付近の区界は前述のとおりかつての字界に由来し、元をただせばどちらの字も手稲町(手稲村)でした。仮に山頂の所在地が札幌市西区であっても、手稲山が手稲区のシンボルであることに揺らぎはありません。

その 2 松浦武四郎、島義勇は、手稲のどこを通ったか？

きっかけは、2022 年に開催された当会の「手稲開村 150 年記念特別講演会」です。古沢仁氏(札幌市博物館活動センター)が「札幌の地史から見た手稲」と題して講演し、「松浦武四郎は手稲のどこを歩いたか」に言及されました。古沢氏が考察したのは 1873(明治 6)年に作られた「札幌郡西部図」(図 2、以下「西部図」)です。西部図には、現在の手稲区辺りで「銭函道」が描かれています。この道は同年に馬車道として整備されました。原形は幕末に開かれた「サッポロ越新道」とみられ、松浦武四郎や明治の初めに島義勇が歩いたと思われます。(*)

古沢氏は、西部図をその後の国土地理院地形図と重ね合わせて検討しました。その結果、西部図に描かれた道(銭函道)は現在の国道 5 号よりも「平地(海)側を外回りに大きく迂回している」ことがわかったそうです。古沢氏の検討は西部図に描かれた道＝松浦が歩いた道(サッポロ越新道)、という前提に立っているため、松浦が(島も)歩いた道は、国道 5 号(大正期までの旧道)よりも海側にあったこととなります。実際にどうだったのでしょうか。

私も、西部図に描かれた道を旧版地形図(明治時代、**図 3**)に重ね合わせてみました。結論的に言うと、西部図の道(銭函道)が国道5号(旧道)よりも「平地(海)側を外回りに大きく迂回している」とは見究められませんでした。古沢氏は西部図について「河川などは比較的正確に描かれている」と述べています。しかし、より正確なその後の地形図と比べると、指標となりそうな河川(改修された現在の流路の前の自然河川)の位置が場所によってずれているのです。比べ方によっては、西部図の道は国道5号に近い位置にも見えます。

古沢氏は「いずれ、この道(引用者注:西部図の道)がなぜここを通ったのかを、実際に歩いて検討したい」とも述べましたが、その後亡くなられました。遺志を受け継いでいきたいと思えます。

(*)松浦武四郎が現在の手稲区で歩いた道は年によって異なるとみられる。

4 おわりに 一本日のお話のまとめ

私の提案はあくまでもたたき台です。ブラッシュアップされるとともに、新たな散策コースが作られることを願います。これをきっかけに手稲区に足を運んでみようという人が増えたら嬉しい限りです。

掲載図版 キャプション

一等三角点の記			
		基準点コード	
		TR16441418501	
ふりがな	ていねやま: 手稲山:	1/20万図名	1/5万図名
点名	札幌	銭函	一次 第 111 部
冠字選点番号	也 第 10号	設置区分	地上(保護石 4 個) 上面舗装
標識番号	標石 第一 号	柱石長	0.82 m
所在地	北海道札幌市西区平和439番1		
		地目	山林

図1 国土地理院「一等三角点の記」(抜粋)
所在地は「北海道札幌市西区平和 439 番 1」

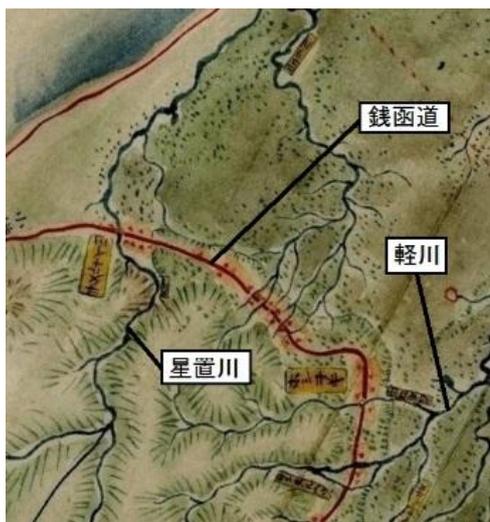


図2 札幌郡西部図(道立図書館蔵)
川名、道名を加筆

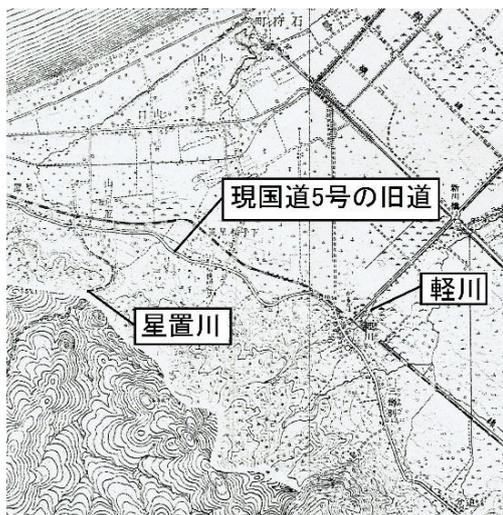
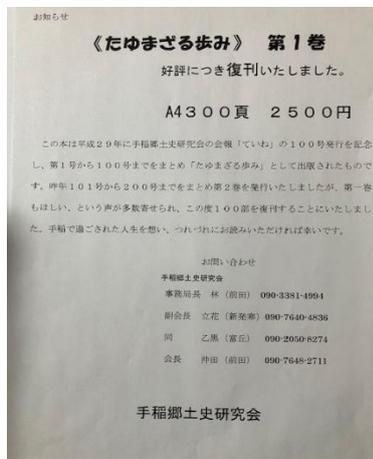


図3 旧版地形図 5 万分の 1 札幌・銭函
(明治 42 年部分修正)
川名、道名を加筆

—「たゆまざる歩み」第1巻再版のお知らせ—

会報213号で案内いたしました様に、ご希望が多かった「たゆまざる歩み」第1巻の復刊(100部)が完成いたしました。

以下のチラシの様に、¥2500でお分けいたします。



ご希望の方は、下記当会員にお問い合わせください。

林事務局長（前田） 090-3381-4994

立花副会長（新発寒）090-7640-4836

乙黒副会長（富丘） 090-2050-8274

沖田会長（前田） 090-7648-2711

次回定例会 令和8年 3月11日(水) 18時15分～ 区民センター3階視聴覚室

発表内容 「子供の頃の話」 手稲郷土史研究会 会員 武市 尚子

手稲郷土史研究会 会報「郷土史でいね」第214号 令和8年2月11日発行

発行責任者：沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会長） 編集：菊池博行・伊藤政克

❖006-0818 札幌市手稲区前田8条11丁目4-5 林俊一方 手稲郷土史研究会

*TEL 090-3381-4994 *FAX 011-682-9874

❖メールアドレス teinenorekishi@gmail.com 担当 菊池 博行